

庄内環境創造型農業推進会議 田んぼの生きもの調査



穂が出始めた、志藤正一さんのふゆみず田んぼ

調査日時：2006年6月26日(月)

参加人数：50名

参加団体：東栄小学校5年生22名、庄内農業高校3年生13名、藤島庁舎エコタウン課、山形県庄内総合支庁農業技術普及課、庄内協同ファーム

調査地点：冬期湛水・不耕起・有機栽培田(志藤さん)

調査項目：生息環境調査、イトミミズ・ユスリカ調査、コドラート調査、カエル調査

生きものと農法の関わりについての理解深まる

今年2回目の調査は、昨年同様、東栄小学校の児童を迎え、庄内協同ファームの生産者、志藤正一さんの冬期湛水田で行われました。1回目の調査に比べイトミミズの数減りましたが、それを餌とするカエルやトンボは増えました。

志藤さんは「事前に田んぼの生きものと調査の意義についてレクチャーし、当日は高校生が指導役に付いたので、子どもたちも意欲をもってくれました。生態系が農業と関わっていることも伝わったのでは」と、手応えを感じている様子でした。

庄内地域では農業者を中心に始まった「田んぼの生きもの調査」。農業者だけが調査を行うのではなく、地域の小学生、中学生に活動の輪が広がっています。行政の応援もあり、トンボの舞う志藤さんの美しい田んぼを中心に、運動が地域に浸透しています。調査の指導ができる人も地域に増えました。

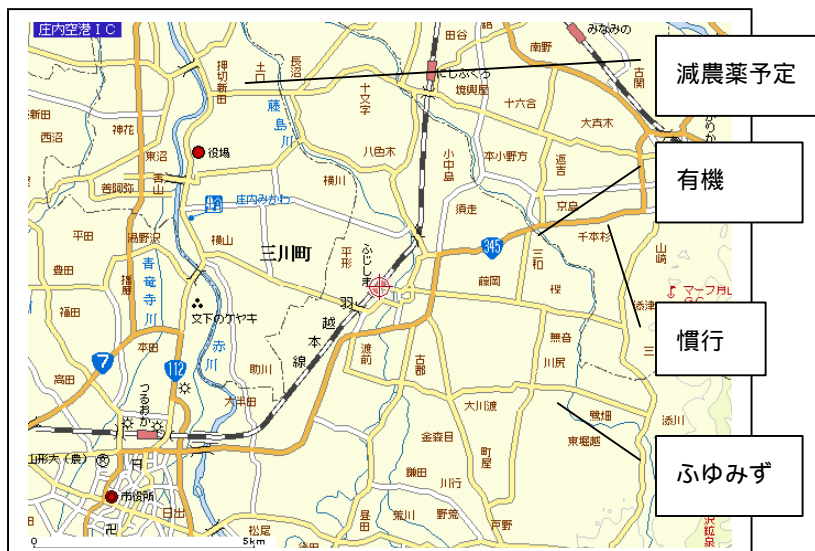
農業地帯であっても食の生産現場と食卓が遠くなってしまったと言われる現代。食のありかたを伝える「食育」が注目されるようになりました。未来を担う子どもたちが、環境を守る農業へ関心をもつことが、地域の農業を育て、豊かな地域社会作りにつながっていきます。

庄内環境創造方農業推進会議

産地紹介：J A庄内たがわ、庄内協同ファーム、みずほ有機米の3つの農業団体と公益大学などで構成。

主な出荷銘柄：はえぬき、コシヒカリ、でわのもち

組合員数：J A庄内たがわ〇〇〇名、庄内協同ファーム26戸(うち非農家4戸)・36名、みずほ有機グループ10名

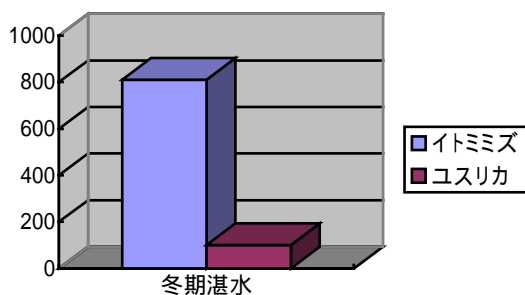


結果発表！

	調査項目	冬期湛水
土のなかの生きもの調査 (10aあたり/匹)	イトミミズ	810万
	ユスリカ(幼虫)	100万
生息環境調査	調査時刻	10:00-11:00
	天気	晴れ
	風	強い
	気温()	29.6
	水温()	33.2
	水深(cm)	-
	pH(酸度)	7.50
	EC(電気伝導度, mS)	0.065
	DO(溶存酸素量, mV/l)	9.8
	ORP(酸化還元電位, mV)	-60



たくさんいるとカエル調査にも熱が入ります



小さな生きものを一生懸命探す小学生たち

見つかった生き物たち

冬期湛水・コドラート 10a 当たり : ヒル 21 万 6,666、
ドブシジミ 5 万、ミジンコ 6,666、モノアラガイ 6,666、
ヤゴ 3,333

冬期湛水・カエル 100m 当たり : ニホンアカガエル
853、ニホンアマガエル 442、トノサマガエル 236



調査のまとめ

データを読む 中場理恵子さん(農業技術普及課専門普及指導員)ほか

中場さん：春先はイトミミズ・ユスリカが中心だったが、他の生きものの種類が増え、多様化してきた。とくに陸に揚がったばかりのカエルは、畔に止って数えなければならないほどいた。子供たちには、ヤゴが他の小さな虫を食べて大きくなるように、イトミミズが餌となって減った分、他の大きな生きものが増えて

いる。
志藤正一さん(庄内協同ファーム)：貝類(モノアラガイ・ドブシジミ)が、田んぼの水を落としても増え続けている。ただ、1ヵ月ごとの調査では、変化があることは分かるが、その原因はよく分からない。1週間ごととか、もう少し期間を短くして、土壌や有機物の量の変化などを、もう少し総合的に調べる必要がある。